

早速利用させていただいた。この文庫とはほぼ同時期にやはり蔵書家として知られた宗田一先生のコレクションが、京都の国立日本文化研究センターで公開されたことと合せ、我々の受ける恩恵は大である。ことに「中野操文庫」は天文二十一年(一五五二年)と記された古医書の写本、幕末から明治初年の医師番付四十余枚などが注目されるが、現代に至るまでの広範囲がカバーされているのが特長といえよう。

「中川五郎治顕彰碑」について

松木 明知

平成十年(一九九八)五月に筆者が会長として函館市で主催した第九九回日本医史学会の主題の一つは中川五郎治と北立系の種痘法に関してであった。

この年はジェンナーが牛痘種痘法について著書を公刊してから丁度二〇〇年になり、またジェンナーの種痘法をシベリア経由で日本に伝えた中川五郎治の歿後一五〇年になるという節目に当たっていたからである。

中川五郎治の歿後一五〇年を記念して、彼が活躍し、そして歿した松前の地に顕彰碑を建立した。学会前日の一九九八年五月十六日に英国ジェンナー博物館のピーソン館長や松前町、松前町教育委員会などの大勢の関係者を迎えて除幕式が

盛大に行われた。

重さ十二トンの自然石の台座の上の顕彰碑は縦一二〇センチ、横二〇〇センチ程の黒御影石で、洵に立派である。その建立場所は中川五郎治の両親と彼が眠る法源寺の墓地に近い。ここは観光道路に面しているため、松前城を訪れる多くの人たちが必ず眼にするところである。

この建碑によつて、これまで一般の人たちは殆ど知られる所がなかった中川五郎治の業績が少しでも知られるようになるれば、顕彰碑建立者の一人として、これに過ぎる喜びはない。碑文は次の通りである。

中川五郎治顕彰碑

中川五郎治は本名を小針屋佐七(おばりやさしち)といい、一七六八年(明和五)青森県下北郡川内町に生まれた。一八〇七年(文化四)エトロフ島の幕府会所に勤務中、ロシア船の来襲に遭遇し、シベリアへ拉致された。五郎治はシベリアでの艱難辛苦に耐え、一八一二年(文化九)の帰国時、牛痘種痘法を習得し、ロシア語の牛痘種痘書を持ち帰った。五郎治伝来の種痘法は松前、箱館、秋田、そして津軽で普及されたに留まったが、その情報は遠く京都や大阪に伝えられた日本の医学界に大きな衝撃を与え、以後の日本の牛痘普及を大いに促進させた。

彼は一八四八年(嘉永元)に松前で歿し、同町の法源寺の両

親の墓に葬られた。その歿後一五〇年に当たり、第九九回日本医史学会が函館で開催されるのを機に碑を建立してその功績をたたえる。

一九九八年(平成十)五月十六日

松前町

日本医史学会

弘前大学医学部麻酔科同門会

沖縄医学生教習所碑再建について

新垣 敏雄

平成十一年七月十四日沖縄県医師会は、『沖縄医学生教習所記念碑』の再建を完了した。琉球史を概観しながら、同教習所の足跡と再建について報告する。

琉球に関する記述が中国の記録で最初に現われるのは、『隋書』の流求国伝である。隋の大業三年(六〇七)煬帝が朱寛を「流求」に派遣し、流求人を探えて帰ったとされている。

「琉球」の字があてられたのは一四世紀以降であり、明の洪武帝が、琉球の中山王「察度」に与えた銀印に刻まれた後、定着した。

伝説時代からようやく実在の人物が、琉球史に登場するのは一二世紀の末頃である。その頃、琉球に三山時代があり、中山王、南山王、北山王と称して三山抗争をしていた。

一三七二年(明・洪武五)明の楊載が琉球に派遣され、明に入貢することをすすめた。

これを受けて、中山王であった察度は、弟の泰期を遣わして入貢した。中国を宗主国とする献上と下賜の関係であり、冊封体制のはじまりである。

中琉両国の貿易は、貢物を献上し、何倍もの価値のある物品を下賜される朝貢貿易であった。

中山に続いて南山(一三八〇年)、北山(一三八三年)も入貢した。

一三九二年、明の太祖(洪武帝)は「閩人(福建人)の善く舟を操る者三十六姓」を下賜された。そして北京の国子監にはじめて留学生(官生)が派遣された。下賜された「閩人」は、琉球の久米村に集団で生活し、水先案内人、舟大工、通訳、政治顧問として琉球王府に貢献した。

明からは、三山の抗争をやめるように言われていたが、一四二九年尚巴志によって三山統一が完成し、中山王となり首里の地に王府を築いた。

医療については、民間療法や経験的医療だけであり、一六〇九年薩摩の侵攻以後は、薩摩から医者を招いて人民の医療に当らせたとされている。

一五三四年冊封使として来琉した陳侃は『使琉球録』に、